

コースメモ
38. 汲ん場ーナ
39. 橋ー10
40. 汲ん場ーラ
41. 橋ー11
42. 汲ん場ーム
43. 汲ん場ーウ
次号へ
44. 橋ー12 (八田橋)

朽かけし我が蔵を描く人あり
その傍をひそと通りぬ

絹枝

の歴史を含め、次の世代へ語り継ぐ責任の重さをあらためて実感します。

「橋ー11」のすぐ下流にある「汲ん場ーム」は、満水の時期には石段の上部まで水につかり、水藻と共にゆらめいています。この辺りから溝はゆるやかな右カーブを描き、家並みに沿って下ります。がっちり組まれた石垣沿いには、四季折々の花樹が美しく水辺に映えて、人々の和みの散策路として親しまれています。初夏には黄色く熟れたビワの実や、真っ赤な大粒のグミの実が実り、子どものころに口にしたあのおいしさを思い出させてくれます。柿が色づき、石垣を突き破って大きく張り出したハゼの木も晩秋には紅葉が一段と増し、夕日に照らされる色もまた格別です。

ほかにタブの木、カシ、ツツジ、アジサイなどが季節ごとに彩りを添えます。

しかし、この豊かな水辺もホルがめつきり少なくなりました。樹木の消毒をするとホタルの幼虫が育たず、消毒を止めると新芽を虫に食べられてしまい、樹木を枯らすことになり困っているという話を聞きました。

小柳地区のはずれに、八田橋があります。昔は、この辺りに「馬の川入れ」と言われた牛馬の洗い場がありました。今では農家の人が、ちよつとした洗い場「汲ん場ーウ」を作り利用されているようです。

次号は、八田橋から寺山田方面を紹介するとともに、今年の小雨傾向を心配された裂田溝関係者による「雨乞い神事」を紹介します。



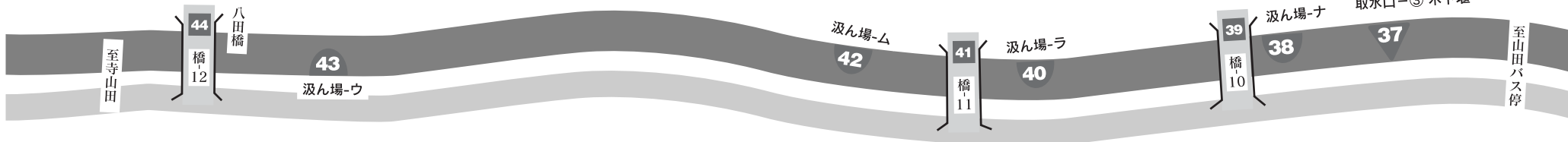
小柳の秋景色
柿が実り、ハゼの葉も赤く色づきます。五感を大いに刺激される季節です



裂田溝の清掃の日
雨の中でも地域の人総出で清掃です。やがて水面に光がきらめき、豊かな流れと変わります



汲ん場ーム



川掃除が終わり、花樹のせん定をされるご夫妻
水辺の景観を守るのは、地域の人たちです

「橋ー10」を渡ると、西側に「汲ん場ーナ」があります。この橋げたの石積み幅は川幅の3分の1くらいまでせり出していて、小柳地区独特の橋台です。橋の上に立つて北側に目を移すと、一面青々とした田園風景が広がります。現在はその中央を平成9年に開通した県道575号線「山田・中原・福岡線」が通り、山田交差点は東西を結ぶ交通の起点となっています。

県道の北側200mほど先に、丸くブロックで囲まれた石仏があります。この石仏の由来は定かではありませんが、昔から「山田七天神」の一つと言われ、大切に祭られています。田んぼの真ん中にある

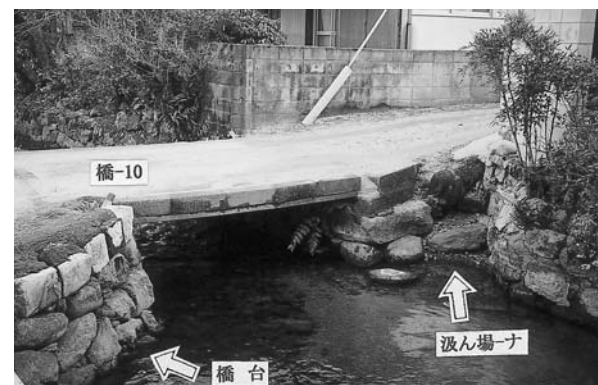
ため、稲が実るころには姿がすっぽりと隠れてしまいますが、稲刈りが終わるとまた遠くからでも分かるようになります。

次の「橋ー11」は小柳地区の一番下流にあり、西側に「汲ん場ーラ」があります。この橋は両隣の共同で架けられた橋で、やはり古いものだそうです。車が大型化すると、昔ながらの狭い橋では通りにくくなります。そこで横幅を継ぎ足し、隅切を広く取り、車が進入しやすいようにされています。小柳地区には大小7つの橋がありますが、どの橋も個人の所有や共用で、費用も労力も各戸が負担して大切に管理されています。

低い水面から高い田んぼへ水を送る小柳地区独特の地形は、橋造りにも知恵が生かされます。橋の工法を見た大学の先生は「昔の人はすばらしい。工学的な知恵があったとですね」と感心されていたそうです。私たちは日ごろ何気なく見過ごしてしまいがちですが、独特なものがあるようです。地区の農事や水利に詳しい古老から、いろんなことを教わりました。ここでしか見ることができない独特の橋造りや井堰の仕組みなど、もっと広く紹介して多くの人に知ってもらいたいと願っています。説明板を立てると、子どもたちも興味を示してくれるでしょう。周囲



橋ー11と汲ん場ーラ



橋ー10と汲ん場ーナ



汲ん場ーウ
以前、「馬の川入れ」と呼ばれる牛馬の洗い場がありました



石仏
山田七天神の一つ。秋には、この辺り一面が黄金色になります

探訪 90

ながわ

那珂川町郷土史研究会

裂田溝17

こやなぎ 小柳地区周辺

